

研究課題	ICT を活用した非認知能力を育成する学習の研究
副題	～「自ら学ぶ力」を育てる学びの道筋の授業実践研究を通して～
キーワード	自己調整的な学び、探究的な学び、個別最適な学び、不登校
学校/団体名	公立松阪市立殿町中学校
所在地	〒515-0073 三重県松阪市殿町 15081 番地 1
ホームページ	https://www.tonomachi-matsusaka.com/tonomachi/

1. 研究の背景

本校は、平成26年より松阪市「教育の情報化」推進事業の指定校に選定され、1人1台端末の環境整備が行われてきた。そのため、全国に先駆けて教員、生徒ともに1人1台端末の活用が可能となり、学校としても授業の実践研究を積み重ねてきた経緯がある。さらに、令和3年1月には松阪市全体での「松阪市 GIGA スクール構想」がスタートし、校内への高速無線ネットワークの整備、特別教室を含むすべての教室への大型モニターの設置が進み、どの授業においてもICTを使用することが可能となった。これらの支援により、現在は教師の基本的なICT活用技能および指導能力が身に付いている状況である。2022年度の全国学力・学習状況調査では、88.4%の生徒が「授業においてほぼ毎日ICTを使用した」と回答しており、98.5%の生徒が「ICTが学習に役立つ」と回答している。一方、「自分で計画を立てて学習する」生徒は63.6%、「総合学習で自分で課題を立てて探究活動を行う」生徒は73.6%と、「自己調整的な学習」、「課題解決的な学習」において課題が見られた。このことから、課題に焦点化した教員のICT活用の研究を深めるとともに、学校としてカリキュラムや方法を研究し、方向を示す必要があると考えた。

2. 研究の目的

本校では、「対話的な学び」を教育の土台とし、すべての授業で協働的な活動を通して生徒の力を育成する授業改革に取り組んできた。2022年度は「自他を尊重し、つながり・深め合い、主体的な学びを実践する生徒の育成」を研究主題として研究を深めてきた。今年度は、さらに「個別最適な学びとwell-beingの実現」を副題に設定して研究を進める。具体的には、生徒の「主体的な学び」「自己調整的な学び」に重点を置き、自ら学びを深める生徒の姿を実現するために研究を深めたい。この「自ら学ぶ力」は、今後の変動の大きな社会を生きる力の重要な核になると考えられる。さらに、ICTの活用は、「自ら学ぶ力」の発達を促す重要な道具になると考えられることから、授業実践を通じた研究を進めていく。研究的な側面では、教師の協働的な探究により、これまでの蓄積に基づいて教育学の理論や先進校の実践から学ぶとともに、校内で協働的な研究を重ね、本校独自の学びの道筋を描き出すことを目標とする。

3. 研究の経過

本校は、研究の焦点を自己調整的な学び、探究的な学び、支援を要する生徒を含む個別最適な学びの探究の三点に置き研究を行った。

研究方法として、全体研修会におけるゴールと方法の共有、講師を招聘した学習、教科部会に

における実践研究、先進校への視察と全体への還流の四点を軸として進めた。

(1) 自己調整的な学び

変化の多い社会において、自らの歩みを振り返り、学びを次の実践につなげていく力を育むためには、長期的な範囲で教育活動の中に省察活動をデザインすることが必要である。

本校では、今年度「じぶんログ」というスケジュール帳型の教材を導入した。毎日の記録を行い、1週間のスケジュールを俯瞰して計画的に生活、学習をする力や、メタ認知のサイクルを身に付けさせるとともに、教師が定期的にコメント、アドバイスを行うことで、教師と生徒の親和的な関係を構築し、生徒の自己調整的な生活、学習の定着を支援することを目的とした。

さらに、松阪市全体で購入しているデジタルアプリ「eライブラリ」と連動させ、「じぶんログ」に「eライブラリ」を使った1週間の学習計画を立てて実施する経過を記録することとした。

(2) 探究的な学び

今年度は教科における探究学習と、総合学習における探究学習の二点に焦点化する。

本校で研究を進めてきた「指導と評価の一体化」については、単元でつきたい力を明確にし、知識・技能、思考・判断・表現、学びに向かう力がバランスよく育まれていくよう、カリキュラムをデザインするという意識が共有されてきた。これをふまえ、昨年度に引き続き、石井英真先生の『ヤマ場をおさえる学習評価』に学び、教科部会において探究活動を「ヤマ場」に据えた単元デザインおよび授業実践の研究を行う。具体的には、教科部会において単元のカリキュラムデザイン研究と、授業公開週間における相互参観、実践の振り返りを行う。

さらに、全校体制におけるICTを活用した総合学習の試行的な実践研究を行う。文部科学省による「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）」では、ICTの効果的な活用により、学習の成果をまとめ、表現することや、内外への情報発信が可能であることを示している。本校では、収集した情報をまとめ、表現、発信する活動に重点を置き、ICTを活用した探究サイクルの確立をはかる

(3) 支援を要する生徒を含む個別最適な学び

令和3年の中教審答申では「令和の日本型学校教育」と題して、全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現が強調されている。また、令和5年「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」では、生徒の個々のニーズに応じた多様な学びの場や居場所を確保することの重要性が示されている。本校では、教科の授業における「個別最適な学び」の実践研究に取り組むとともに、別室に登校する生徒や不登校生徒も含む全ての生徒の「個別最適な学び」を実現するため、講師を招聘した学習、先進校視察、教科部会等における実践研究を行う。

【研究の歩み】

時期	内容	取り組み	分類	評価のための記録
4月12日	全体研修会	ICTを活用した家庭学習について方法とゴールの共有	1	
	教科部会	カリキュラム、評価方法の検討、探究テーマの設定		教科目標設定シート(教師)

5月31日	全体研修会	個別最適化について講演会 英心高校 中林洋賀先生	3	
6月14日	全体研修会	特別支援生徒についてブリーフミーティング	3	
6月	授業公開週間	教科部会での授業デザイン検討、授業の相互参観	2 3	授業参観シート（教師）
7月	生活学習アンケート①	全校生徒の生活、学習状況、意識の把握		アンケート調査（生徒）
7月12日	教科部会	公開授業の協働的振り返り		
7月24日	全体研修会	特別な支援を要する生徒のケーススタディ 浜松学院大学短期大学部教授 志村浩二先生	3	
10月	生活学習アンケート②	全校生徒の生活、学習状況、意識の把握		アンケート調査（生徒）
10月	授業公開週間	教科部会での授業デザイン検討、授業の相互参観	2 3	授業参観シート（教師）
12月	特設ホームページ公開	総合的な学習の時間における学習成果の公開	2	振り返りアンケート調査（生徒）
1月19日	全体研修会	総合的な学習の時間における探究学習のデザイン 松阪市教育委員会 廣田裕美先生	2	
2月	生活学習アンケート③	全校生徒の生活、学習状況、意識の把握		アンケート調査（生徒）
2月28日	教科部会	1年間の研究の振り返り		研究のまとめ（教師）
	研修アンケート	研究の自己評価、効果的な研修の検証		アンケート調査（教師）
【先進校、団体視察】 (2) 福井大学教育学部附属義務教育学校、越前市吉野小学校、横浜国立大学教育学部附属横浜中学校/鎌倉中学校、松阪市立東黒部小学校、松阪市立飯南中学校、松阪市立東部中学校、探究学舎 (3) いなべ市立北勢中学校、株式会社デジタル・ナレッジ				

4. 代表的な実践

(1) 自己調整的な学び

「じぶんログ」は、毎日、夕学活で次の日の予定を記入し、家庭で一日の振り返りと書くとともに、宿題として行うデジタルアプリ「e ライブラリ」の学習状況も記録することとした。(写真1、2)

一週間の学習サイクルは、以下の通りである。

月曜	単元テスト1回目/学習計画を立てる	
火曜	ドリル（基本・標準・挑戦から選択）	
水曜	ドリル（基本・標準・挑戦から選択）	
木曜	ドリル（基本・標準・挑戦から選択）	木曜学習会にて補充学習
金曜	単元テスト2回目	

月曜に単元テスト1回目を行い、その結果をもとに一週間の学習計画を立てることとした。火曜から木曜の3日間は単元ドリルを行い力をつけ、金曜には月曜と同じテスト2回目を行うこととした。これにより、生徒が自らの定着度を把握し、必要な学習内容を考えて選択する力がつくだけでなく、同じテストをドリル学習の前後で行うことにより、自らの定着度の伸びを見ることができ、達成感につながると考えた。「じぶんログ」は写真にとって授業支援クラウド「ロ



写真1



写真2

イロノート」に毎日アップし、学級担任がクラウド上でチェック、アドバイスをを行った。

さらに、毎週木曜は家庭学習の実施状況によって各学年で放課後に学習会を行い、課題の達成に困難を抱える生徒に対して個別支援ができるようにした。

(2) 探究的な学び

<教科における探究活動>

4月の全体研修会で「ヤマ場」をおさえたい授業の方向性を確認し、教科部会で探究テーマを検討した。テーマに基づき探究的な学びを「ヤマ場」に設定した単元デザインを作成し、6月、10月に全教員が授業公開を行い、教科部会内で互いに参観して事後検討を行った。(写真3)



写真3

さらに、探究的な活動を通して ICT 活用の力を育むため、インターネットによる情報収集や、情報分析、プレゼンテーション作り、動画づくりなどの実践を各教科の授業において行った。(写真4)



写真4

<総合学習における探究活動>

今年度は、全校体制における ICT を活用した総合的な学習での探究活動を試行的に行った。総合部会において、文献や、松阪市教育研究会での学び、先進校視察の学びを還流しながら企画検討を行い、研修会と連動して実践を開始していった。全体テーマを「殿町中学校 松阪おもてなしプロジェクト」と設定し、松阪市の実施している地域活性化イベント「みえ松阪マラソン」に全校生徒がボランティアスタッフとして参加することから、「全国のランナーに松阪市の魅力を発信すること」をコンセプトとして総合学習を開始した。

① 課題の設定

今年度は、松阪市に関する基本的な知識を幅広く得るために、各学級の生活班に「人」「祭」「文化」「食」「史跡」「お出かけスポット」の6つのテーマを割り振り、各テーマ内で課題設定を行った。



写真5

② 情報の収集、整理・分析

主に、1人1台端末のインターネットを用いて行った。複数のグループは、より探究を深めるため、遺跡、史跡や地域の企業等に出向いて見学やインタビューを行った(写真5)。情報はロイロノートに蓄積し、各班でクラウドを用いて協働で整理、分析を行った。



写真6

③ まとめ、表現

ICTの活用方法を学年ごとに発展させ、1年生は新聞、2年生はプレゼンテーション、3年生は動画の形式でまとめることとした。

1年生はロイロノートを用いて、各メンバーが作成した記事を新聞の形式でまとめた。クラウド上で協働で原稿の推敲を行った。(写真6)



写真7

2年生は、パワーポイント、キーノート、ロイロノートを用いてプレゼンテーション資料を作成した。発表を前提として、スライド上の文字を制限し、相手に伝わるスライド作りを心がけた。(写真7)

3年生は、教科授業の実践を土台にして、動画づくりを行った。キーノート、ロイロノートを活用し、画像、動画、音声の加工、編集等、多様な技能を用いて興味を引く動画づくりを目指した。(写真8)



写真8

学習成果はテーマごとに発表会を行い、ロイロノートのアンケートによって、ホームページに掲載する代表作品を選出した。代表作品は、パソコン部の制作した総合学習特設ホームページに掲載した。(写真9)



写真9

特設ホームページ「殿町中学校 松阪おもてなしプロジェクト」は、本校ホームページにリンクを貼るとともに、「みえ松阪マラソン」ホームページにリンクを掲載させていただき、全国から参加するランナーが閲覧できるようにした。

(3) 支援を要する生徒を含む個別最適な学び

本校は、教室での学習に困難を抱える生徒のために別室を整備し、落ち着いた環境で学習できる配慮を行ってきた。今年度は、別室に通う生徒、および家庭で学習行う生徒を支援するため、ロイロノートを用いた学習支援を行った。

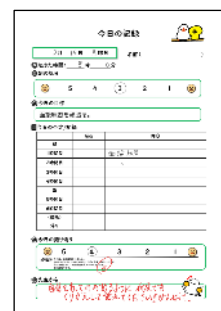


写真10

具体的には、一日の学習予定と振り返りを記入させ、自らの歩みを可視化することで、メタ認知を促し、次につなげることができるようにした。一日の記録はクラウドに上げて、教師からコメントをもらうことで、双方向的なコミュニケーションを促し、活動を支援できるようにした。また、記録は蓄積されるため、長期的な視野で学習の歩みを振り返り、生徒が肯定的な変化を実感できるようにした。(写真10)

5. 研究の成果

(1) 生徒の自己調整力の向上

1週間を単位とする学習計画と実行のサイクルが定着した。今年度5月の全国学力・学習状況調査における3年生の回答と比較し、自ら計画を立てて学習すると回答する生徒が増加した。(表1)

家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。			
		1	2
2023年5月学調	全国	15.3%	39.7%
2023年5月学調	本校	12.9%	39.7%
2024年2月アンケート		24%	38%

1:あてはまる 2:どちらかといえばあてはまる

表1

(2) 探究的な学びの充実

本校のICTを活用した探究的な学びのデザインの原型が形作られた。全ての教科において、教師の探究的な学びへの挑戦が見られ、生徒アンケートの「興味のわく授業が行われている」という質問への肯定的な回答が平均81%という結果となった。また、国語、数学、英語、理科において「教科の学習がすき」と回答した生徒が、全国調査(理科は令和4年調査)と比較して1~12ポイント多かった。総合的な学習において「探究的な活動を行った」と回答した生徒は、90%であり、今年度5月の全国学力調査の本校結果より12.4ポイント

総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。			
		1	2
2023年5月学調	全国	28.9%	43.7%
2023年5月学調	本校	25.0%	52.6%
2024年2月アンケート		53%	37%

表2

増加した。(表2) 振り返りでは、多くの生徒が、地域の良さや地域を支えることの重要性に気づくことができた。

【生徒の感想】

- ・取材で行った店は松阪には昔の伝統を代々大切にしている和菓子屋さんがあり、歴史を大切にしながら作っているのでこれからも松阪を守っていききたいという心を持っている人が多くいました。
- ・観光客の方達のために、その場所を綺麗に保ってくれている人がいたり、掃除してくれる人がいたり、地域の人や、私たちの要望に応じてくれているということがとてもよくわかりました。
- ・何百年も前に建てられたものが今でも残っているため、そこから私たちが住む松阪市のことについてより知ることができ、私たちもまだまだ知らないことがたくさんあることに気づいた。そして、この歴史ある松阪市を後世にも受け継いでいくために、私たちは松阪のことをもっと知っていかなければならないと感じた。

松阪市教育研究会において、全校体制の ICT を活用した本校の総合学習デザインについて発表を行い、中規模校における総合学習の研究において重要な実践として評価された。

まつさか GIGA フェスタ 2023 では、フォト・ムービーコンテストに学習成果である動画を出品し、主催者より ICT 活用技術の高さ、作品の独創性の高さに評価をいただいた。

(3) 支援を要する生徒の学びの変化

ICT を活用することにより、生徒の学びの過程を生徒、教師がともに見て対話をするのが可能となり、生徒が見通しを持って生活する機会や、自己の成長を肯定的に評価する機会となった。過去の記録と比較して、自らの変化や成長を実感する生徒の姿があった。

6. 今後の課題・展望

今年度の研究により、「自己調整的な学び」「探究的な学び」「個別最適な学び」について、「自ら学ぶ力」を育てる学びの道筋の原型を示すことができたが、まだ萌芽的な段階であり、さらなる研究が必要であることも同時に明らかとなった。次年度は、今年度示された学びの道筋を教師、生徒ともに対話的、協働的に探究し、充実させていきたい。

7. おわりに

本研究を通して、子どもの「自ら学ぶ」道筋をデザインするという挑戦に、教師が協働的に取り組むことによって、謙虚に自らの実践を振り返り、生徒の学びを支援するという共通の意識を育てることができたように思う。ビジョンを共有する教師集団の成長、同僚性の構築が、研究を通して得た最も重要な成果の一つであった。最後に、本研究の推進にあたり、松阪市教育委員会、松阪市子ども支援研究センターをはじめ視察を受け入れていただいた学校の皆様、地域の皆様、地域を支える企業や団体の皆様に多大なご支援をいただいた。あらためて感謝申し上げたい。

8. 参考文献

- ・石井英真、鈴木秀幸編著 (2021) 『ヤマ場をおさえる学習評価 中学校』教育図書
- ・文部科学省 (令和5年) 「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策 (COCOLO プラン)」
- ・文部科学省 (令和4年) 「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 (中学校編)」
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター (令和2年) 「「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 総合的な学習の時間」